

2018.11のブログ：「A Iと美学・芸術」特集を読んで、の詳細（その1）

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1811>)

「芸術の進化的起源」を読んで

■この本の読書のきっかけ

人工知能学会誌（2018.11）「A Iと美学・芸術」特集の「芸術の進化的起源」（齋藤亜矢 p.754～p.761）の中に、言語の獲得過程との関連に言及する部分があり、興味を持った。

特集号の全体説明では、本稿について、「霊長類の絵画行動の研究からヒトの進化の視点から見た芸術の本質に迫る論考」と、紹介されている。

■読後感

- ・言語能力の獲得過程は本稿の主題ではないが、私が興味を持つ思考言語（内言）とコミュニケーション言語（外言）の関係に関して、4章の例は興味深い。すなわち、石器の制作過程で、一つの石核から複数の用途別の石器を掘り出していたという事実から、この道具をつくるための手順を考える思考過程は内言（思考言語）と同じで、その手順を他者に伝える過程は外言（コミュニケーション言語）に対応する。

■断片的コメント

以下に、興味本位のコメントを述べる。

『・・・』の部分は、本文の引用。

→★の部分は、私のコメント

【1. はじめに】

『本稿では、人間と人間以外の動物を比較して、芸術がどのように生まれたのか、進化と発達の視点からその起源について考察したい』

→★人間以外の動物と比較した人間の特徴としての「言語」への言及に興味あり。

【2. 芸術と進化】

『（洞窟壁画について）多くの地域で共通して描かれているのは、主に動物の具象画や手形、そして記号のような図形である』

→★コミュニケーション言語の一種とみることができる。

【3. 描画行動と進化】

『例えば片方の目が消えている顔に自由に描いてもらうと、

人間の場合は、平均すると2歳後半で、描かれていない目を補って描くようになった』

『これらの研究から示唆されたのは、表象を描くことと、見立ての想像との強い関係である』

→★これは、図を記号や言語として共有に認識するためには重要な能力といえる。

【4. 想像力の進化】

『言語を獲得したことによって、人間は、見たものをカテゴリー化し、ラベルを付けて認知する特性を持った』

『言葉に置き換えることによって、見たものや事の記憶を情報として整理することができるし、他者にも効果的に伝えやすくなる』

→★同意。ここでの言語は、コミュニケーション言語。

『（石器の）制作過程では、一つの石核から、複数の用途別の石器を掘り出していたこともわかっている。この石器製作の過程で想像力が育まれたという説がある』

『石器製作の工程を見ているときに脳の言語野が発火するなど、脳の使い方としても、石器製作と言語の使用に共通する部分があることが明らかになっている』

『道具をつくるために手順を並べるのは、意味を伝えるために単語を並べるのと似ていて、いわば行為の文法であると指摘されている』

→★ここでの言語は、工程の認識は思考言語（内言）で、意味を伝えるための表現はコミュニケーション言語（外言）。

『人間は、言語を得たことで、想像力を手に入れた。そして想像力を手に入れたことで、描線に物の形を見立てて絵を描くことができるようになった』

→★ここでの創造力獲得の前に獲得した言語とは、いわゆる言語というよりも、意味のある記号としての言語。本章の前半で述べられているように、初期の幼児の記号的な絵を「顔＝輪郭＋目＋目＋口」とみる。

【5. 表現欲求の起源】

『洞窟壁画に描かれているような先史時代の絵でも、儀礼との関りが指摘されていて、コミュニケーションの側面は大きかったと考えられている』

→★同意

【6. 進化の視点から見た芸術の本質】

『必要な情報にだけ目を向ける「選択的注意」も巧みになり、
普段見えているつもりで見えていない物がたくさんある。
しかし、この偏った認知的な特性があるからこそ、
人間は芸術を生み、求めるのではないかと考える』

→★同意

以上